

我流子育て支援論 ～ 幼児期 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

子どもと言うものは、気がつくときと大きくなっていく。特に乳児期は大変なので、毎日があっという間に過ぎていくし、成長スピードも卵から胎児への成長の次に速い。こうして乳児期を無事に過ごすと、厄介な幼児期に突入する。幼児期は言葉と精神の発達が著しい。言葉で指示が通る反面、言うことを聞かなくなる時期でもある。この時期、母親はかなりイライラしたり、不安になったりする。

まず相談を受けるのが、公園等の小集団へのデビューである。

既に出来ているグループの中に入れない、或いは入りたくないと訴える母親たち、まるで女子生徒の問題と同じである。そういう母親は小学校や中学校、或いは高校でいじめにあったり、仲間はすれの経験があって、人間関係が苦手と言うことが多い。

母親の苦手さは受け止めつつも、「子どもは遊ばせたいが・・・」と言うところを軸にして、まずは砂場のあたりで子どもを遊ばせていけば、きっかけが出来るからと伝え、公園など子どもが集まる場所に行かせて見る。それで上手く行くケースも多々あるが、仲間には入れたものの、今度は付き合いに疲れて結局公園等に行かなくなる母親もいる。そういう母親には、公園ではなく、支援者が介在できる児童館や子育て支援センター、子育てサロンの活用を勧める。連携が取れれば前もって「こういう母子が行くからよろしく」と指導員等に伝えておく。連携が取れなくても行っていけばそこで誰かの目に留まり、声をかけてもらえる可能性は高い。人関係が苦手な母親は百貨店の遊び場を好んで活用しているようで、それはそれで支持している。家に閉じこ

もっていても、子どもも欲求不満でエネルギーをもてあまし、余計に母子を煮詰めることになる。どういう場所であれ、子どもがのびのびと遊べる場を活用することができれば、母親としては頑張っていると言えよう。とにかく、閉じこもらないように、誰かの目に触れるようにしていくことが大切である。

地域の子育て支援の場は増加傾向にあるので、我々支援者はどのようなものがあるか、どういう人がやっているのかもきちんと把握し、連携がとれるようにしておくことが良いだろう。

次に多い相談で、子どもや親同士のトラブルがある。例えば玩具の取り合い。2歳くらいであれば、玩具の貸し借りは難しく、取った、取られた、噛み付いた、引っ掻かれたなど、日常茶飯事。このようなことに、母親は何処まで出て行くべきか？酷い話では、「噛み付くなんて凶暴な子とは遊ばせられない！」と怒鳴りつけられたことで対人恐怖になり、以来二度と公園に行けなくなった母親も居る。

こうした問題は幼稚園や保育所等、集団に入っても起こる。子ども同士の喧嘩が親同士の喧嘩になり、大騒ぎになることもあり、先生方も間に入って大変である。そのせいか、最近子ども達の喧嘩の経験が全般的に減ってきたように思う。

「仲良く」と言う言葉が前面に出すぎて、喧嘩をさせなくなっているのだ。

喧嘩をすることや、仲直りをするのも成長の過程では必要な経験である。人間関係がこじれても、やり直せると知る最初の段階が、幼児期の喧嘩ではないかと思っているのだが、その喧嘩自体をしないのでは何処で学べば良いのか？

喧嘩をさせない一つの大きな理由に怪我が問題がある。「大事なわが子に怪我をさせるなどとんでもない！」と言う親の気持ちはわからないではないが、集団に居ても居なくても怪我はするものだし、集団に居ればぶつかったり、引っかいたりなどは当たり前にかかるものだという認識を持ってないことに問題があるといわざるを得ない。しかも、我が国の欧米化の波は、訴訟を起こすことへの抵抗感をなくし、損害賠償の問題が集団の場で大きくなっている。昔は訴訟を起こすことは極めて特殊で、一般市民に馴染みの深いものではなかったため、父母が訴訟に巻き込まれることなど殆どなかったが、この訴訟の問題は、子育ての場面では幾度となく出てくるようになった。ボランティア活動や、様々な事業でも、怪我や事故の問題があって、保険に入るようになった。集団の場であれば、保険が適用されるが、公園などではそれも叶わない。喧嘩をさせないように、怪我をさせないように気をつけてしまう親の気持ちも、そう考えると無理からぬことかもしれないが、子どもは何かしらフラストレーションを溜めるのではないだろうか。

勿論今でも、口喧嘩や仲間はすれ、噛み付いた、叩いた、押したといった問題を起こす子が一部いるが、親の躰が悪いと批難されたり、子どもが発達障害ではないかと疑われていたりする。乱暴な子はみんな発達障害なのか、そんな訳が無い。

保護者の幼稚園や保育所に対する思いと、子育てに向かう姿勢については、昔と今で大きく違っているように感じる。

もう20年以上前のことだが、東京の

某幼稚園での話。「最近の保護者はミシンを持っていないし、園のバザーなどで協力してもらおうと思っても、出来ないといわれてしまう。」と園長先生が嘆いていらした。まな板や包丁を持っていない保護者のことが話題になったこともある。スーパーマーケットでは、少人数用にカットし、パックされた野菜や肉があるため、包丁やまな板がなくても困らない。キッチンバサミで済むことも多いのだ。

幼稚園や学校では、大抵バザーがある。食品は〇157の問題などもあって、手作りは減ったが、小物を手作りして売るのは一般的だ。今はやりのシュシュや袋物、小学校で使う給食袋など、手縫いの物もあれば、ミシンを使うものもある。勿論ボンドを使って作る作品もある。筆者も、写真立て、ピアニカ用バッグ、布製の花などあれこれ協力した。

使い捨ての現代では、何かを手作りすることや修理をすることが減っているが、家庭で子ども達に見せていくことは、とても大事だと思う。作る手間ひまを考えれば、買った方が早い。物によっては安く済む。しかし、簡単に買って、壊れたら捨ててしまうのではなく、自分の好みにあったものを、自分なりに工夫したり、変えたりして作ることはとても楽しいし、修理して使うことは、物を大切に扱うことへ繋がる。作ることや直すことの楽しみを伝えていくことも保護者の務めだろう。

子育てには保護者を巻き込まねばならないと考え、園がバザー等で協力を仰いだり、あれこれ言うと、「迷惑」とか「忙しいから」とか言われて逃げられるばかりか、そういう噂が口伝えで伝わって、

幼稚園自体が敬遠されてしまうことさえある。

子どもが少なくなってくると、幼稚園は園児獲得に四苦八苦する。保護者にとっては、バスでの送り迎えは当然、弁当よりは給食、英語教育や音楽教室、体操教室などのあるなしも園選びの指標になっている。延長保育も多くなって、幼稚園が幼児教育だけではなく、生活全般を見ていく保育園化しているのは否めない。保護者の給料が高いと、保育園は割高になる。幼稚園が延長保育をしてくれると、保育園より安くて便利と言うこともあるだろう。子どもの争奪戦の中では仕方のない現象なのかもしれないが、何でも保護者の希望に添ってばかりで良いのだろうか？

幼稚園に対する保護者の思いは様々だ。身体を使って泥だらけになるような園を好む保護者と、白いタイツや靴下が汚れず、大人しく、きちんと躰ける園を好む保護者との二極化が進んでいるように思う。服を汚すと保護者から文句を言われると先生や保育士は言う。

子どもとは無限に近いエネルギーを持った生き物だと思う。子どもが元気に遊んできた証の汚れを叱られるのでは、子どもはじっと部屋に居て、ゲーム、お絵描き、テレビやビデオ、PCで遊ぶしかないだろう。有り余るエネルギーを発散させられないとしたら、鬱積した物を残しはしないか？最近の子ども達のエネルギーの低さは、小さいときから良い子を演じてきたツケではと思えてしまう。

子どもはペットではない。人格を持った一人の人間で、親とは別の個体である。しかし親はともすると考え違いをして、

子どもは自分の思い通りになると思っている。そうして育てられる子は、いつも親の機嫌を気にして、良い子を演じる。良い子の何と多いことか。幼児がじっと座ってられる、はきはきとおしゃべりが出来るなど、余り良い子で居ると余計不安になってしまう。

もちろん、誘拐や幼児への悪戯、殺傷事件など、社会状況も子どもたちを外に出さなくなった原因の一つであろう。子どもたちを安心して出せる環境作りについても訴えていかねばならないが、出せる環境があっても出さないとすればそれは保護者の問題になる。

加えて、幼稚園でも家庭でも、遊ぶ玩具が多すぎる。知育玩具なるものも増え、子どもの創造性や工夫を引き出すと言う玩具をあちこちで見かける。しかし、そういう玩具を与えることより、何も無い自然の中で、遊ぶ方法を探す、考える、工夫することの方が、子どもの創造性やコミュニケーション能力を発達させるにはずっと良い。何も無いからこそ、誰かと遊ぶことが楽しくなるのではないか？

ところで、以前、三歳児から幼稚園で受け入れることへの賛否両論があったが、今は、プレ幼稚園として、二歳児から受け入れているところも増えた。父母が働いていて保育所を活用せざるを得ない場合はともかく、母親が家にいるのに、集団に入る準備もないまま、そんなに早くから、無理やり母親から引き離されることが、子どもの精神発達にとって本当に良いことなのだろうか？子ども達の発達も個人差があるのだから、それに応じて、一年保育でも、二年保育でも構わないだろう。右へ倣えの三年保育には賛同でき

ない。「古い」と言われるかもしれないが、愛着形成のためにも、3-4歳までは家庭でゆっくり育てても良いのではないだろうか？

最近、小学校低学年の母子分離不安による不登校が増えているように感じるが、その遠因に早期の母子分離の問題があるのではないかと思う。

地域で子ども達が群がって遊ぶような時代ではないので、速く集団に入りたいと思う気持ちは分らないでもない。また、早く子育てから開放され、「働きたい」「自分の好きなことをする時間を持ちたい」と誰でも思うだろう。しかし、「子どもが大きくなるまでもう少し我慢しよう」と思うことも大切ではないか？

我慢の出来ない親から、我慢できる子が育つのだろうか？

何でもローンで買う時代である。現金での生活は分相応になるが、ローンはつい背伸びしやすい。最近では「お金ないよ」と親が言うと「借りてくれば？アコムとかで」と言う幼稚園児がいるくらいだ。お金が幾らでも降って湧いてくると思っている。そんな風にしたのは大人たちであろう。もっと我慢することを意識して伝えていくべきではないか。子どもの口から貸し金業者の名前が出るような時代はおかしい。

「子どもは子どもらしく」あるべきで、そのために我々支援者は、親を親らしく育てねばならない。

「子どもとは手のかかる生き物で、面倒くさいことが沢山あり、喧嘩も怪我も成長に必要なことであり、喧嘩をして初めて身の守り方、喧嘩の仕方を学べるのだ」と、保護者向けの講座で話している。

痛い思いをしなければ人の痛みはわからない。喧嘩すること自体を止め、子どもらしく接することを制限しては、育つべき物も育たない。ましてゲームが一般的な時代である。Wii や DS ゲームの中の怪我は誰も痛くないし、死んでも生き返ってしまう。その様なバーチャルな世界を幼児期から見れば、しかも、ゲーム機の進化と共に、それがどんどんリアルな物になってきたら、現実と非現実の世界の線引きが難しくなってしまうだろう。こんな時代だからこそ、生身の人間同士で喧嘩をし、痛い思いをすることがあえて必要になると思うのである。

ゲームの影響については、又改めて語りたいと思っているが、保護者の関り方にも「生身感」がなくなっていると感じる。

以前、三歳児健診の場に居た時、「お名前は？」と言う質問に指を三本立てて出す子を度々見かけたが、これは健診前の母親の特訓の成果であろう。質問と答えが一致しないのは、「いくつ？」ばかりに拘った結果と思われる。子どもの発達を気にするのは健診の前だけなのか？普段から保護者との外出を通じ、他の大人と会話をしていけば「いくつ？」「お名前は？」といった質問に触れることは多く、一般的には自然に獲得できる内容である。しかし、保護者自身が生身の人間と付き合うことを避けているために、自然に学べることも、今はあえて声掛けしなければならないのである。

更に、健診で発語が遅めの子どもに対して、「言葉掛けを増やしてください。」と言うと、「どんな風に掛ければよいのか？」と聞かれることもある。そんな時

は、実際にボール遊びの場面を再現し、「行くよー。」「コロコロ」「転がったねえ。」「捕まえてー。」「上手上手（パチパチ）」「はい、ちょうだい、こっちだよ〜。」などと言葉掛けの例を示す。育児書は沢山あっても、ここまで具体的に示している本はないのである。ではそうした言葉掛けを、筆者はどこかで学んだかと言うと、そんな覚えは無い。小さい頃から、目にしてきた風景が、教えてくれたのだと思う。

現代の一番の問題がそこにある。そういう風景を目にしなれないということだ。我々支援者は具体的に子育ての風景を見せていかねばならない。

子どもたちを取り巻く環境は、科学や文化の進歩とは逆に、悪化しているように思う。

大人になりきれない親の元で、子どもになりきれないまま育っていくことの無理が、未来に暗雲をもたらしているように感じる。幼児期の環境は、子どもの精神的発達に大きな影響を与える。二言目には「疲れた〜。めんどい。」しか言わない幼児を目の当たりにして、笑って済ませていて良いのだろうか？

都心部ではまだ公共交通を使うだろうが、地方では自家用車を使うことが多い。その分、子どもたちは歩くことが減った。風雨や雪の中を親子で頑張って歩けば、子どもの忍耐力が少しは育つのではないだろうか？

食事も子どもの好きなものばかり並べるのではなく、何でも文句言わずに食べさせるべきではないか？これがだめならこっちと言うように、直ぐに代わりの物を与えるのでは、好き嫌いはなくならな

い。そして、例え多少不味くても、人に作ってもらったら、感謝して食べるようにすべきではないか？我慢はここでも大事だろう。飽食の時代だからこそ、感謝や我慢をあえて言わねばならない。

こうしたことは、まずは保護者がお手本として家庭で実践し、躰として教えるべきことで、保育所や幼稚園で学ばせねばならない内容ではない。幼稚園や保育所が担うべき部分と、家庭で担うべき所の境目は、多少の重なりがあるにしろ、きちんと線を引く必要があると思う。

子育て支援では、支援をすればするほど、支援が増え、支援者は大変になる。その分、保護者は楽になり甘える。

我々支援者は、保護者に対し、「今は支援がたくさんあるから、子育ては大変ではないよ」と言うのではなく、むしろ、「子育ては大変だが楽しい」と伝えるべきだろう。社会は今、少子高齢化ゆえに、子どもを生まれようと虚像を伝えすぎているか。子ども手当をばら撒けば、子どもが金づるになってしまい、育てることはそっちのけで次々と子を産む家も見かける。子育て支援も今一度見直し、子育てにほどほどに手をかけることの重要性を訴えていかねばならないと思う。

ほどほどとは、過多でも過少でもない、丁度良いところ、程よいところという意味である。何でも誰かにお願いし、お金で済ませられる子育てでは、生身感もなく、親子の愛着形成の意味では、過少になるだろう。生真面目で、細かい親の場合は、過多になる。我々支援者は、その保護者個別の「ほどほど」を査定し、親子の愛着形成がなされていくことを目的として支援すべきであろう。

そして、物を大切に我慢する、我慢できる大人、許容量のある大人を育て、子どもを子どもらしく育てる支援をすることが、我々の仕事でもあるのだ。

今回は学童期について書いてみたい。

